

講演記録

大学博物館の新しい役割

林 義 博

国立科学博物館 館長

コメンテーター: 足立 守

名古屋大学特任教授 (名古屋大学博物館前館長)

司会: 宗宮 弘明

中部大学応用生物学部長

講演会を開催するにあたって 宗宮弘明

博物館(museum)の語源ムーセイオンは、ギリシア神話のムーサ(学芸の女神, Muse)を顕彰する場所を意味します。中部大学はすでに民族資料博物館を持ち、本年新たに蝶類研究資料館を開設しました。大学の機能は教育, 研究, 社会サービスの3つです。大学博物館は, この3つの機能の有機的に統合するための組織と考えられます。林良博館長の話をもとに「大学博物館の夢と役割」を議論したいと考えています。

開催日時: 2016年11月17日(木)14時30分~16時

開催場所: 中部大学 不言実行館

アクティブプラザ アクティブホール

主 催: 中部大学応用生物学部 大学院研究科
生物機能開発研究所共 催: 中部大学国際ESDセンター
蝶類研究資料館 民族博物館

○司会(宗宮)

皆さん, こんにちは。楽しみにしていた講演会「大学博物館の新しい役割」を, ただいまから始めます。

パンフレットの「講演会を開催するにあたり」という短い文章にも書きましたが, 大学の機能は教育と研究と社会貢献です。教育が最初にあり, 2番目に研究, 3番目が社会貢献, この三つを統合するための機関が大学であると僕自身は考えております。今日ご講演くださいます林先生はまたちょっと違う大学観をお持ちでしょうが, 「大学博物館」はこの大学の三つの機能に, どのように関係するかを学ばせて頂きたいと思っております。

林先生は1946年, 広島県生まれで, 僕も1946年生まれですから同年齢です。東京大学農学部畜産獣医学科を卒業された獣医さんで, 東京大学で農学博士を取ら

れ, ハーバード大学客員研究員, コーネル大学客員助教授, 東京大学教授, 東京大学総合研究博物館館長をされました。僕がお会いしたのはこのころだったと思います。その後, 東京大学の農学部長, 副学長をされ, 2010年には山階鳥類研究所所長に就任されまして, 同時に東京農業大学教授もなさった後, 2013年には国立科学博物館の館長に就任されたというご経歴をお持ちです。

僕自身, イギリスの大英博物館にも友達がいまして, いろんな博物館に行っている人と議論をしたものですけれども, 中でも林先生はいつもユニークな意見をお持ちでした。先ほど15年ぶりにお会いしてお話したら, まだユニークな意見を堅持されていて, 非常に心強く思った次第です。

今日は, 林先生の講演の後, 名古屋大学博物館前館長の足立先生からコメントをいただき, その後議論をして, 4時ごろには終わりたいと思っております。よろしくお願いいたします。では, 林先生, よろしくお願ひします。(拍手)

○林

皆さん, こんにちは。ご紹介いただきました, 国立科学博物館の館長をしております林と申します。私は, 経歴で言いますと, 今ちょうど紹介いただいたように, 総合研

究博物館の館長を2回しております。最初は農学部長になるためにやめざるを得なかったのですが、3年間と4年間ということで、合わせて7年間、大学の博物館の館長をしていました。現在は国立科学博物館にありますが、これが3年半ぐらい経ましたので、もう10年を博物館で過ごしており、大変いい人生を送らせていただいていると思っております。今日は博物館の話をさせていただきたいと思います。私、無類の犬好きですが、今日はその話はいたしません。

今日の話の流れとしましては、まず国立科学博物館のご紹介をしたいと思います。博物館というのは本当にたくさんありまして、博物館・博物館類似施設の総数は日本全体で5,700を超えています。大変な数です。そんな博物館について、そもそも博物館とはどういう機能を持っており、何を目的としているのかということをお話したいと思います。最後に、大学博物館のこれまでの役割と今後の役割は少し違ってくるのではないかなと思っておりますので、そのことをお話したいと思います。

国立科学博物館の概略を申しますと、ここは総合的な科学博物館で、まず動物、植物、鉱物などの自然史を扱っています。それから、担当者は少ないのですが、人類学も自然史の中で扱っています。それ以外に科学技術史も扱っています。

科学館と科学博物館は、名前は似ているものの、大いに違います。科学博物館は、「博物館」という名前がつく以上、標本がどのぐらいあるか、その数によって価値が決まってきます。標本がない博物館というのは、基本的にありません。しかし科学館は、例えば、東京のお台場に未来館がありますし、名古屋にも科学館があり、特に子供たちに対して科学のおもしろさを上手に教えています。科学館は、そういうところですから別に標本がなくていいのです。つまり、標本があるとはどういうことかという点、自然であれ科学技術であれ、歴史から学ぼうというのが原点になっているわけです。そのために、博物館には標本があるし、標本がないといけません。

そもそも、私ども国立科学博物館の一番の最初は、先ほど宗宮先生がおっしゃったように、やはり教育から始まっています。「教育博物館」という名前から始まりました。そして、いろいろな変遷をたどりました。例えば、関東大

震災のときは、木造の全館が消失し、ほとんどの標本が失われました。そういう悲しい歴史もあります。第二次世界大戦のときは、博物館のある上野は地盤がしっかりしておりますし、ちょっと高いところですから、高射砲部隊の中核になりました。そのため博物館を閉じました。軍部にとっては邪魔だったのですが、標本の一部は疎開させられ、二度と戻ってこない標本も少なくありませんでした。そういう2回の受難の時期はありましたものの、これまで順調に推移して、平成13年には独立行政法人化しています。法人化にはいい面と悪い面の両方がありましたので、それは後で少しお話します。

国立科学博物館には日本館と地球館の二つがありますが、このスライドは地球館にある系統図です。床にライトがあり、実物を見せながら、ありとあらゆる生き物がどのように進化し枝分かれしてきたのかを示しています。改修のたびに少しずつ改良してきました。私が子供のころの博物館は、暗くて怖いイメージでした。何となく古びたにおいもしていました。それでは今の子供たちは来てくれません。博物館にも美術館的な要素、美しい要素をきっちり取り入れるということが、かなり重要なのではないかなと思っています。

常設展示と特別展示・企画展示という二つの展示がありますが、このスライドは日本館の常設展示です。日本館は大きくありませんので、あまり展示していませんけれども、資料としては3,000点ぐらいあります。フタバスズキリュウというのは日本でしか生息していなかったもので、実は恐竜の仲間ではなく、枝分かれしたグループですけれども、まだ中学生だった鈴木君が発見しました。ほぼ全身の骨格がありまして、そのレプリカを展示しています。このスライドは典型的に美しくできたと思う海の展示です。それから、「シアター360」というものもありまして、360度で地球の変動などいろいろなものをお見せしています。

また、日本館にはほかの博物館とはちょっと違ったコーナーがあります。私たちは、いかに有名なものであっても基本的に特別扱いせず、個別に明示することはないのですが、こればかりはそれではあまりにも不親切だということで、「秋田犬(ハチ)」と書いてあります。ところが、これでも99.9%の人は本物のハチ公だとわからない

のですね。例えば、お年寄りの方などから、「国立科学博物館に忠犬ハチ公がいると聞いて来たのですが、どこにハチ公は展示されているのですか？」という質問が非常に多い。ですから、お尋ねの多いものについては、それを示すために、ちゃんとしたパンフレットもつくっております。このスライドがハチで、後ろにいるのがジロです。ジロは典型的な樺太犬です。昭和基地で何とか1年間生き延びたタロとジロのうち、ジロはここにいますが、もともと北海道で生まれ育った犬でしたので、タロのほうは北海道にいます。その隣にいるのは甲斐犬で、これは日本の典型的な在来犬です。物語のもとになるような標本はいっぱいあるので、それで物語をつくるのもいいのですが、当館の方針としては、なるべく個性よりも生物としての特徴を知ってもらいたいということで、ハチ公だけ特別扱いするようなことはしないという展示方式をとっています。

地球館のほうには、約9,000点の標本を展示しています。このスライドは、私の知る限り世界で最も美しい剥製です。日系二世のヨシモトさんという方から寄贈されたものです。ヨシモトさんは、戦争のとき本当に苦労されたそうですが、ハワイで成功されて、ほとんどの動物をご自身でハンティングされています。それが許された時代だったのですね。今この中で何が許されているだろうと思うぐらいですけども、ここでは展示できないぐらいたくさんありますので、半分以上は筑波の収蔵庫の中に眠っています。

この剥製がいかにかすごいかというと、ヨシモトさんは、子供たちに見せるためにこれを残したいと思われたのですね。それで、ハンティングの現場に剥製師も含めたチームで行って、ハンティングした瞬間から前処理をし、最後はアメリカに持ち帰って剥製に仕上げています。アメリカの剥製師はたくさん経験をしていますので、残念ながら、日本の剥製をつくられる方に比べてすばらしく腕前がいい。剥製師の人たちの頑張り、と、ヨシモトさんが投じた巨額の経費によって、アメリカ、ヨーロッパに引けをとらないどころか、それを上回る内容のものができています。地球館の3階にあるのですが、これを一日中ずっと眺めている方もおられます。恐らくすごい癒しになっているのではないかと思います。

地球館の中で一番人気なのは、地下にあります恐竜です。私どもの博物館には今研究員が60名いますが、これはそのうちの一人の真鍋といいます。最近ではどの大学にも名物教授というのがいまして、それがよかったり悪かったりするのですけれども、この人も子供に大人気です。

今年の6月に、シーボルトが標本を持ち帰ったライデン(オランダ)の博物館の館長と2人だけで話したいということでお伺いしたところ、大歓迎してくれて、2人で半日間話したのですが、ライデンの博物館は私どもの博物館とよく似ています。彼らも基本的に「family based museum」(家族で楽しむ博物館)です。国立科学博物館の来館者は、3割が15歳以下の子供で、7割がそれ以上の年齢の大人です。小さな子供たちが「恐竜展に行ってみたい」と親やおじいちゃんおばあちゃんにせがんだり、逆に、例えば「生命大躍進」という展示などですと、これはどうしても子供に見せておきたいと、親のほうから子供を引っ張り出したり、いずれにしてもそういう仕組みなのです。

一番最初のスライドで私がこんな格好をしているのも、これにどういう意味があるかということ、子供が喜んでくれるのだったら何でもしようという気になっているわけです。ついこの間、「大アマゾン展」をしたのですが、アマゾンといえば淡水魚ですので、子供に大変人気があるさなクンという方に公式サポーターとして来てもらって、内覧会でオープニングをしたときの写真です。彼は最初からたくらんでいたのでしょうが、ちゃんと帽子を二つ持ってきておりまして、「館長はこれをかぶらなきゃだめですよ」と言うので、素直にかぶっております。恐竜もそうですが、子供たちが喜ぶのであれば、私たちもできる限り展示を充実させていきたいと考えております。

また、これまでとちょっと違うのは、今ものすごい勢いで恐竜学が発展しています。この間、世界で恐竜の研究をする人間の数が恐らく100倍ぐらいに増えました。そのおかげもあって、恐竜の新しい事実がどんどんわかってきております。大体2年半に一度ずつ恐竜展をするのですが、その2年半で新しいことがわかってくるのです。

特にアジアでいえば、実はモンゴルが恐竜の宝庫です。2014年にモンゴルの恐竜だけで「大恐竜展:ゴビ砂

漠の驚異」をしたときには、世界で一番強いのが恐竜で、アジアで一番強いのが白鵬だということで、この間 1,000 勝した白鵬に公式サポーターになってもらいました。モンゴルはまさに恐竜の宝庫です。もともとモンゴルで人骨を発見しようと思った人がたまたま恐竜を見つけたところから始まっているのですが、いろいろなことがわかってきています。

例えば、ここにいるティラノサウルスは座っていますよね。この辺に土台があって、足がこういうふうに見えています。肋骨ではなくておなかの側にこういう骨があるのがティラノサウルスの特徴です。つまり、前足が非常に短いのですね。これが何の役に立っていたのか、また、ティラノサウルスはふだんどんな格好をしていたのか、いろいろ謎があってわからなかったのですけれども、今の新しい研究成果では、ティラノサウルスはふだんしゃがみ込んだ格好で座っていて、獲物が近づいたら、前足を一番最初の手がかりにして、地面を前足で蹴って立ち上がって飛び出していたのではないかとされています。私たちは一番新しい学説に基づいてこの形でティラノサウルスの展示をしております、あちこちに置いてあるものの中で、恐らく世界でもこれが一番早かったのではないかと思います。

恐竜は、研究者が増えているだけでなく、大変なビジネスにもなっています。世界的にそうですけれども、日本でも恐竜で飯を食っている会社が結構出てきています。そういうところは新しい学説が出ることを嫌がります。例えば、恐竜には表面にかなり羽毛が生えていたことがわかってきておりまして、最近ではその羽毛の色までわかりつつあります。ティラノサウルスもそうで、これは骨格標本ですから毛がありませんけれども、剥製のレプリカをつくるときには、どんな形をしていたか、どんな色をしていたかということで、わかっている限り忠実に新しい学説を入れていくわけです。ところが、恐竜ビジネスの人にとって、それは困る。なぜかという、羽毛が生えたらかわいらしくなるからです。最近では動く恐竜も出ていますが、あれで子供たちが集まって泣き叫ぶことが業界にとっての大成功なのです。怖がってくれないと恐竜ビジネスは成功しないかもしれないと言われるぐらいなのです。しかし、私たちはビジネスをしているわけでは

ありませんので、やはり子供たちには一番正確なこと、一番新しい事実を展示していくということでやっております。

それから、私たちには植物園が二つあります。まず、目黒の駅の近くに白金台というところがありまして、そこに自然教育園というのがあります。ここは完全に手をつけません。木が倒れても、人が散策できるようになっていますので、もし道路に倒れた場合、どかさなければいけないのですが、それ以外は倒れたままの状態ですずっと保存していきます。この自然教育園は、それ自身が天然記念物になっています。もう一つの筑波のほうは実験植物園で、北から南までをゾーニング(区分)しながら植物を紹介しています。中でも人気なのは、ショクダイオオコンニャクという世界最大の花です。これは 5 年に一遍以上はなかなか咲かないと言われているのですが、最近ではよく咲いています。1年置きぐらいに咲いてくれて、ものすごく臭いのですが、たくさんの人が来られます。

問題は標本数です。先ほど言いましたように、自然史や科学技術史では標本数が大切です。国立科学博物館の標本は今年の春で 448 万点になりました。では、スミソニアン博物館は何点持っているか？なんと、1億 3,000 万点の標本を持っています。大英自然史博物館は 8,000 万点、パリ自然史博物館は 7,000 万点、ドイツの博物館は 6,000 万点持っています。要するに、日本で最大級の標本を持っている国立科学博物館でも、世界と比べると一桁少ないのです。国の力の差が見事にあらわれていると言っていると思います。この間、大英自然史博物館のディクソン館長と話したときには、「おたくはかっぱらってきたものを持っているだけでしょ」と、ちょっと嫌味も言っておきました。私のところにそういう標本はありませんが、そんなことを言っているもしょうがないので、なるべく標本を集めるようにしています。

それから、最近ではどうしても DNA 研究が重要になりまして、DNA が抽出できる冷凍標本が現在 5 万点ぐらいあります。全部フリーザー(冷凍庫)で管理していますが、これも一種の標本です。

常設展以外に、大体 3 カ月間の会期で特別展と企画展をしております。これは二つとも今年開催して終わっているものですが、恐竜博 2016 という特別展に

は 50 万人ぐらいの方が来られました。スピノサウルスとティラノサウルスという二大肉食恐竜の両方を見てみたいという子供たちがたくさん来ました。それから、「生き物に学び、くらしに活かす」という企画展もしました。私たちの研究所にいる 60 人は基礎研究をしている人たちですけれども、基礎的な研究が役に立つこともあります。別にそれを目的とするわけではないのですが、その成果をまた別のところで生かしてもらうのはいいことです。

例えば、新幹線のパンタグラフも、線をこすってものすごい音がしていたので、その微細構造をどのようにしたら一番音が少なくなるかということが考えられておりました。そこで、フクロウが獲物に近づくために音をたてずに飛ぶことから、その構造がどうなっているのかと羽根を調べたわけです。そうしたら、音を消すような非常に特徴的な構造になっていることがわかりました。その知識を 2005 年ぐらいからパンタグラフに取り入れ、日本の新幹線は今このパンタグラフで動いています。フクロウの研究をした人たちは、結果的にそうなったというだけで、別にパンタグラフに利用できることは期待していませんでした。

また、今はオリンピックなどでもいろいろな形(タイプ)の水着が使われていますけれども、水着の表面抵抗が少ないものは両極端で、完全に親水性であるか疎水性であるかのどちらかです。外国では疎水性の水着が開発されましたが、日本でつい最近ミズノは逆に表面が親水性の、水に全く親しむ構造の水着を開発しました。工学でいうとナノテクノロジーの進展が非常に大きいわけです。しかし、もともとカジキマグロの表皮の研究をしたのは生物学者で、別に水着を開発しようと思ったわけでもありませんでした。

それから、中部大学にも 20 万点の蝶の標本があるというお話を聞いていますけれども、蝶にはちょっと普通では出せない色がありますよね。蝶の翅の色は、構造色であって、別に化学的な色素があるわけではないのです。蝶の翅の青色は、光の干渉する性質を利用した構造的なものです。今後は、蝶の翅の構造色を模倣したネクタイなどの衣料品が出てくると思います。

もっと身近なものとして、最近の傘は、雨にぬれても、ぱつと振ると水滴が全部落ちてしまいます。あれはなぜ

かという、植物のハスの葉の構造を真似して傘の表面が作ってあるからです。ハスの葉は雨にあたっても水を弾きますが、あれはナノの単位で見ると葉の表面が水を弾く構造になっているからです。それを傘の表面に応用したわけですが、これからの傘はほとんどが「水を弾く構造」のものになると思います。

今僕が紹介したのはほんの一部で、この展示ではもう既に製品化されているものからされていないものまで 50 件ぐらい紹介しましたが、可能性はもっと無数にあると思います。ただ、私たち「科学博物館」の使命は基礎研究ですから、そのような応用をやりたい方はどうぞやってくださいというのが私たちのスタンスです。

現在は特別展として「ラスコー展」をやっております。これは、フランスの南西部にある洞窟で 2 万年ぐらい前にクロマニヨン人が描いた壁画です。あの辺には洞窟がいっぱいありまして、アルタミラというスペインの洞窟もまさにこの付近です。ただ、日本の高松塚もそうですが、洞窟は湿度が高いので、人がいっぱい出入りするとすぐにカビが大発生します。それで、今ラスコーの洞窟は完全に閉じられ、誰も見られなくなっております。研究者も、いくらきちんとした申請書を書いても、ほとんど見学できません。そのかわり、フランス政府は、この洞窟のある県との共同で 3D スキャンを使って精巧なレプリカ(複製)をつくり、それを現地ラスコーで展示すると同時に、世界に巡回させ始めました。アメリカ、カナダが終わって、今日本に来ています。日本が終わったらヨーロッパの各国を回ると言っていました。日本では、科博で来年(2017)2 月 19 日に終わると、東北の歴史博物館に行き、その後は九州に行く予定です。なかなか見ごたえのある展示です。

それから、「シーボルト」という企画展もしています。シーボルトはなかなかちゃっかりした人で、ツバキなど日本から園芸植物を相当持ち帰っております。ツバキは向こうでさらに品種改良され、いろいろな品種ができています。そして、彼は結構間違ったことを言っています。アジサイを中国原産としていますが、あれは日本原産です。日本のアジサイは結構ヨーロッパの庭に合うし、ツバキなどもうまく合います。そのため、ここは一体どこなのだろうと思うような庭がヨーロッパにあつたりします。

大部分のヨーロッパ、イギリスの大部分とフランス北側までは氷河がおりてきていましたから、そこでは全く動植物がいない世界がしばらく続いていたわけです。そういう意味では、ヨーロッパの植物相を見ると、少なくとも主だった植物だけでも日本の5分の1ぐらいで、種の多様性が少ないと言えます。それが一番はっきりわかるのがユリで、今はヨーロッパでもいろいろな種類が園芸植物として植えられており、花屋さんでも売られておりますが、もともとヨーロッパには1種類しか残っていなかったのです。日本にはユリがいっぱいありましたので、それをシーボルトが持って帰ったわけです。そういったことも割と紹介しています。

アジサイを中国原産と言ったり、学名を間違えて書いています。うちの科学博物館には研究関係の人間がたくさんいますからその間違えが気になるのですが、直しがありません。奥さんの名前をとろうとして間違ったとかいう愉快的話もいろいろあります。

次に、「3 万年前の航海徹底再現プロジェクト」という国立科学博物館での新たな試みをご紹介します。

今はなかなか国からお金が出ませんし、国立科学博物館でも、館長裁量経費というのはあるのですが、あまりにも冒険的な要素が強いことには研究費を配分できません。それで、こういうことをやってみたいということで、うちの海部という男が中心になって、5,700 館ある博物館では初めての試みとして、クラウドファンディングで航海実験をしております。

さっきのラスコー展の、あのすばらしい壁画を描いたクロマニオン人は2 万年前でしたが、日本人は3 万年前に台湾から渡ってきております。3 万年前、台湾は中国大陸の一部でしたから、台湾までは海を渡らなくてもちゃんとつながっていました。でも、台湾から南西諸島は全部独立していたことがわかっていますので、これは海を渡らなければいけません。旧石器時代ですから、木をくりぬくことはできなかったらという想定で、草船でやりました。

今は大学でもクラウドファンディングでやっておられるところが少しずつ増えてきているのではないかと思います。ただ、申し上げておきますが、クラウドファンディングは半分失敗します。成功率 50%です。失敗したらどうな

るかという、最初に幾ら欲しいかということ言うのですが、その金額に1円でも足りなかったら全部もとへ戻します。例えば、この実験には絶対に2,000 万円かかるということで目標を掲げたら、そんなにだらだらやっても集まるものではありませんから、60 日間で2,000 万円を目指します。寄附する約束をして口座登録をしてもらうのですが、そこからの引き落としは成功したときのみです。そういう意味ではものすごくリスクがあります。やってみる価値があると多くの人に思われなければ成功しません。これは結局いくら集まったかという、おもしろいと思った人が多かったのか、2,000 万円でやりまして2,630 万円集まりました。630 万円余計でしたが、別にそれで酒を飲んでいいというものでもありません(笑)。

どうしてこんな航海実験をやってみたいかという、ここ10 年間ほどで3 万年前の遺跡がごろごろ出てきたからです。年代測定の精度も上がっているのですが、一旦見つかり始めると、本当に遺跡がどんどん見つかるのです。それで、こういう人たちはどうやって来たのだらうと考えたわけです。地図を見ていただくと、この灰色の部分はみんなくっついていたのですが、あとは離れていました。当時どのくらい離れていたのか、最短距離を見ると、大体70km は離れております。実際に草船で実験をして、この辺までは何とか手こぎで行ったのですが、結局あとは伴走船に引っ張ってもらいました。これでおめおめと引き下がれないので、2 年計画でもう一回、本当に草だったのかというところまでさかのぼり、木をうまく利用したのではないかとということも含めて考えてみたいと思っております。次のときには竹でも実験したいと思っていますけれども、まだやり方がよくわかっておりません。

予算の話少々。恐らく大学もみんなそうでしょうが、独立行政法人化してから運営費交付金がどんどん減っています。職員も150 人から127 人まで減りました。予算も人員も減らすというのが法人化の目的なのですね。しかし、幸いなことに、私の前の館長たちが頑張ってくださって、来館者数は増えております。法人化した平成13 年には89 万9,000 人の方に来館いただいて、このとき目指せ100 万人という目標を立てておりますが、今は220 万人です。私はもう少し館長をする可能性があります。

ますので、3 倍にして終わりたいと思っております。ただ、人数が多ければいいということではありませんから、あまり大きな館ではない中、どこまで皆さんに楽しんでいただけるかということで今頭を悩ませているところです。

博物館の新しいあり方を考える

さて、ここまで科博の紹介をしてまいりましたが、先ほどから何度も言っておりますように、日本には5,700 館以上の博物館と博物館類似施設があります。例えば、郷土館といったところもあれば、ご存じ美術館も、あれはアートミュージアム、つまり美術博物館ですから、やはり博物館なのですね。それらを全部合わせて 5,700 館という中で見ますと、やはり美術系が多いわけです。各市町村には、自分の町からこんな立派な画家を輩出したということで、その方の作品を展示する美術館が結構あります。歴史系も多くありまして、例えば、国立の科学博物館は残念ながら東京にしかありませんが、歴史博物館は、東京国立博物館、京都国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館と、四つもあります。大きさも、より大きい。科学系博物館は少なく、全体の約 10%の 500 館です。

科学系博物館の中でも、先ほど言いましたように、科学館は標本類をほとんど保有しておりません。自然史博物館と銘打っているものでは、例えば、大阪に大阪市立自然史博物館があります。科博は自然史だけでなく科学技術も両方持っていて、両方の資料に基づいた展示をおこなっています。科学館と科学博物館というふうに 2 字違いで二つに分類される中で、大学博物館は後者の科学博物館に分類されています。なぜなら、大学では研究をしますので、研究をしていると必ず研究対象の何かが残るからです。そういう意味では、大学で科学館というのはあり得ないのだろうと僕は思います。

先ほど日本は標本が少ないと言いましたが、予算も少なく、今から 30 年ほど前は生涯学習政策局が文科省の中で一番大きな局だったのですが、今は一番小さな局になっております。そこが博物館の監督もしていて、当時は 4 兆円の予算があったのに、今や 2 兆円になっています。すごいことです。

さて、博物館には多様な面があります。生活に密着した面もありますが、非日常的な驚きという面もあります。

特に子供たちにとっては、恐竜展などが一番それに近いものなのでしょう。それから、日常では得られない安らぎの場という面もあります。先ほどお見せしたヨシモトさんの剥製などは、安らぎを得るために見に来られている方が随分いるのではないかと思います。

博物館の過去の負のイメージを打破すべく、私たちのような博物館もそうですが、大学博物館もそういった面で変革をしていく必要があるのではないかと思います。

例えば、上越科学館というところが恐竜展をやりたいということで、私たちが応援したことがありました。そのときぜひ見に来てくれと言われたのがこれです。子供たちに恐竜の目線を体験させるため、消防署とコラボして、はしご車で人が上がれるようになっていました。昔の博物館はこんなことしませんでした。これからの博物館はいろいろなところとコラボしたほうがいいのです。大体博物館に来るといって自体ものすごく敷居が高いのですが、まず何としても博物館に来てもらいたい。

博物館を嫌いな人というのは、恐らく子供のころに体験していないのです。生物学的な遺伝と文化的な遺伝ということをよく言いますが、調査結果によると、美術館や博物館に連れていってもらった経験を持たない子供と、そういう経験を持つ子供では、その子が美術館や博物館を好きになるかならないかという点でものすごく差があったそうです。文化は遺伝すると言われてたら何か変なので、あまりいい言葉ではないのですが、そういうことが文化遺伝と言われております。

科博のこういった活動がどこから始まったのかといいますと、3.11 の震災復興からでした。3.11 の震災で、多くの博物館がひどいことになってしまった。特に陸前高田の博物館は壊滅状態で、ほとんどの職員が亡くなり、いろんなところで被害が出ました。そこで、博物館がなければ、公民館とかちよつと広いところがあればできますから、そこで恐竜展をやって子供たちに来てもらおうという活動を始めました。これは恐らく体育館みたいなところではないかと思います。陸前高田市の中学生在が校長先生と一緒にお礼に来てくれて、逆にわれわれにエールを送ってくれたのには感動しました。

中部大学も博物館をお持ちですが、まずは学生さんに博物館に来てもらうことがものすごく重要です。私が東

大の博物館長をしていたとき、東大生は東大の博物館にほとんど来ませんでした。どこにあるのかも知らないと言うから、本当に頭をたたきたく思いました。もちろんほかの人にも来てもらいたいのですが、まず一番来てもらいたいののは学生さんです。今はもう博物館であぐらをかいでじっと待っているのではなくて、逆に博物館が出ていかなければいけないのではないか。まさに先ほどの恐竜展なども、陸前高田の人たちに来てくれと言ったって、来るのは旅費もかかって大変ですよ。そういう意味でも、できる限り外に飛び出すこと。そういうものを「移動博物館」と言いますが、僕は遊びに行くということで「遊動型博物館」と言っています。

それから、今まで国立科学博物館は小学生以上しか対象にしていませんでした。展示も全部そういうふうに組み立てていました。しかし、昨年7月、初めて未就学児を対象にして、一見保育園や幼稚園のようですが、このように改修しました。どうして未就学児を対象にしたかというと、調査してみたところ、全体の9%が未就学児、6歳以下だったからです。よちよち歩きの子や、中にはおむつをしている子もたくさん来ていたのですが、彼らはわれわれの対象ではなかった。でも、もう対象にしようということで、子供たちは触るのが大好きですから、剥製をふんだんに使って、触らせようということを考えました。もちろん滑り台やはしごのようなものもつけました。

こちらのほうにある恐竜は骨格標本ですが、日本の動物の剥製としては、タヌキとかイノシシとかシカがあります。シカは日本全体でものすごく殺されていて、一部は食用になっていますが、ほぼ捨てられています。私は兵庫県に関係しているのですが、兵庫県ですと、毎年4万頭取るうち、食べるのは5%です。90%以上捨てています。それならば、それで剥製をつくればいいわけです。特に未就学児の子供は、シロクマなどの大きな動物を見ると喜びます。動物園でもこんなに近くでは見られないわけです。それから、動物には食う側と食われる側がありますから、動物園ではライオンの隣にヌーを置くことはできません。生きていないというのが子供にとってはちょっと残念なところなのですが、剥製には剥製の持ち分があるので、博物館ではこういったことをしております。

今困っているのは、これが人気を呼び過ぎて、朝行っ

ても夕方までの予約が取れないのですね。ですから、これがぜひ全国に広がってほしいと思っています。科博はそのためのお手伝いをしたい。それほど広いスペースがなくてもできるはずですから、あちこちでぜひやってもらいたいと思います。

それから、これは癒しのほうですけれども、今かなりのところで回想法というものが始められています。特に農機具だとか、日常的な生活用具だとか、風景だとか、ジオラマを使ったものが多いのですが、そういったところに行く高齢者の方にはかなりいい効果があるようで、喜々とされるわけです。私も5年前に前期高齢者になりました。75歳からの後期高齢者は終末高齢者と言い直したほうがいいのではないかと考えているのですが、そんなことを言ったらみんな怒るでしょうね(笑)。少なくとも今私は前期と後期の中間にいますが、実際自分のことから考えてみても、5分前のことは忘れても昔のことはしっかり覚えているものです。回想法というのは、脳を刺激するにはいい方法なのではないか。5,700館の中には回想法に適した博物館もかなりあるのですが、今は学校と博物館、介護施設と博物館、病院と博物館といった横連携が本当にうまくいっていないと思います。

10月にバルセロナで「今後の博物館の社会的役割」というワークショップがありました。スペインも財政から見たら今大変なのですが、あそこの財団がお金を出して、世界から15の博物館を呼び、ワークショップでそのテーマについて論議されました。アジアからは私が呼ばれて行きましたが、いい試みをしている外国の例が多くありました。回想法なども相当されています。横連携をするのがうまい国と下手な国があって、日本は横連携が本当に下手な国なのだと思います。それが今後の課題ですが、大学というのは、そういう連携の中核になれる機関なのではないかと思っています。

特に科学の上では、今はマイクロ科学とマクロ科学と言われますけれども、マイクロ科学が研究者・研究費の大半を占めています。そして、マクロ科学は大半の大学で消滅しています。今いろいろな大学から科博には何とか頑張してほしいと言われるのはどういう意味なのかというと、そういうところがなくなってしまったからなのですね。でも、僕らからしたら、逆に人材をいただくのは大学からなの

で、大学にマクロ科学をちゃんとやる装置が残っていないとまずいのではないか。ミクロ科学とマクロ科学が統合されて初めて科学が発展していくのだらうと思います。

マクロ科学はなかなか定義できないのですが、昔風の言い方をすれば、分類学、自然史の根幹にかかわる分野などがそうだと思います。手法は、実験ではなくて、観察が主体という部分が多い。生態学もマクロ科学に属しますが、理論生態学だけは非観察科学であるため、ちょっと除外します。いろいろなところでフィールド科学として再登場させる動きもあります。私、今日お伺いしてすぐ民族資料博物館へ行ったのですが、あれはまさにフィールド科学ですね。現場からいろいろな資料を集めておられます。

ただ、マクロ科学にはものすごい弱点があります。論文数が稼げないのです。これが大変問題になるわけです。研究者が今ますます少なくなっているのです、インパクトファクターも稼げません。インパクトファクターというのは何のことはなくて、研究者が多いか少ないかだけの話なのです。研究者が多ければみんなが見ますから、インパクトファクターが高くなります。そういうところでも不利ですから、尋常ならざる努力が必要です。

それから、科学というのは今どんどん細分化、先鋭化していますけれども、「科学」という言葉そのものが「分科された学問」という意味ですから、科学が細分化していくのは当たり前で、これは当然のことだと思います。私の友人である文学部の人は「人文科学」という言葉を嫌い、「私たちは分けようとは思っていない」ということで、「科」を入れずに「人文学」と言って頑張っているのですが、なかなか大きな力になりませんで、これをどうしたらいいのかということもあります。ただ、やはり私は、一方で科学が細分化、先鋭化していくのは必要なことだと思うのです。そうでないと全体が発展しない。その上で、それを統合する部分がなかったら、やはり科学として均衡のとれた発展はできないのではないかと考えております。

私が過去 30 年間、科学の世界を見てきた中で、英語で論文を書くというのはいいことだったと思います。ただ、日本文学のようななかなか英語にならないものもあるということは、ちゃんと承知しておくべきです。

そして、論文数が業績評価の最大の指標になっていますが、論文数だけでは分野によって偏りを起こすと思います。例えば、私たちはいくらでも論文を細分化できます。特に医学分野などですと、めちゃくちゃ薄い、紙 1 枚で済むような世界があるのです。でも、人文学などの分野では非常に深い考察が必要なので、100 ページに及ぶような長い論文になることがある。こういうことが起こりうるので、大阪の千里にある民族博物館の初代館長の梅棹さんは、研究者の能力を評価するにあたって最初にページ数で研究費を配分したらしいですね。今はやめているようで、どうしてやめたのか聞きたいのですが、実はそれがかなり正しい判断だったのではないかと。

私が言いたいことは、論文数だけでなく、多様な指標があつていいのではないかとということです。今はインパクトファクターも指標になっていますが、大学で見ると、国際化が大きな指標になっています。あなたの大学の学部には外国人の先生が何人いますか、外国人の学生が何人いますかという部分の点数がものすごく高いので、今日本の大学はどんどん落ちる一方です。中国の特別な大学がどんどん上がっていています。要するに、研究内容がすごいというようなものでは全くないのです。単に教員の比率、学生の比率です。

また、先ほども言いましたが、博物館には悪いイメージがあります。年ほど前、全日空の機内誌を読んでいたら、「民謡は博物館の中ではなく、生活とともにあつてこそ光り輝く」という記述がありました。博物館は一体何なのだ、ごみ捨て場なのかと 2 地震はわれわれがどんなことをしたつてとめられるものではありませんから、起きなければ起きないほうがいいとはいえ、仕方がないことだったとしても、やはり原発事故は人為的な間違いだったのではないかと考える人がすごく増えました。東京電力福島第一原発の重大事故から科学に対する不信が生まれたという事実があつて、残念なことに、信頼度はまだ回復していません。

「科学」というより「学」ということで、「科」をつけないほうがいいのかもしれませんが、やはり大学は「学」の府ですから、科学技術が多くの人に信頼されるために頑張らなければいけません。まずは信頼を回復すること。それから、5,700 館もあれば多様なところがありますから、地

域とともに、市民・子供とともにということで、自分の持っているものをどう生かすことができるか。美術の分野でも、東京には近代美術館がありますが、モダンアートなどの中には、必ずしも子供には理解できないものもあるのかもしれない。大人向けのところもあり、子供向けのところもあり、地域の人のためのところもあり、極端なことを言えば、外国人に日本の文化を知らしめるためのところも当然あっていいわけです。すべての博物館が地域とともにあらねばならないとか、すべての博物館が子供とともにあらねばならないとか、全部の要求に応えなければいけないということではないだろうと私は思います。例えば、今日は中部大学の民族資料館を見せていただきましたが、民俗学的なことについては、やはりあれだけの広いスペースを持っておられ、あれだけの資料を持っておられるのは悪くないと。ただ、すべての人にとってどうかと考えると、やはりあの博物館だけでは満足できない人がいるかもしれません。

また、名古屋キャンパスのほうには蝶の標本をたくさん持っておられるとのことでしたが、これについては今いろいろなところで困っているのですね。日本は蝶が一番有名で、世界で最も個人が質の高い蝶のコレクションを持っているのは日本だと言われているのですが、そういう方たちがどんどん亡くなりつつあるのです。ある標本は、もう海外流出してしまいました。何とか国内にとどまっているものでも、置き場所に困っているところが多くあります。今回は中部大学が引き受けられたそうで、幸いでした。

大学ですと、すごい蝶の標本を持っているところがあります。ある一定レベルでいろいろな標本があるという意味では 430 万点の国立科学博物館が日本最大なのですが、九州大学は蝶の標本だけで 700 万点持っているという話です。ところが、九州大学が博多市内から郊外に移転するときに、タイミングが悪かったのか、ものすごく冷遇されて、今でも解決しておりません。この間ちょつと外から見ましたが、あれでは毎年どんどん劣化していきます。困ったものです。

個人で集められている標本、あるいは経営的に立ち行かなくなってもうやめたいというような博物館の標本は、ある程度ちゃんとした保存場所のあるところが引き受け

なければいけません。私が東大の博物館長をしていたときには、何をとち狂ったのか、石原慎太郎が東京都の高尾山にある小さな自然科学博物館をやめると言い出して、結局私たちが引き取ったことがありました。あの人はそういう乱暴なところがあります。もう終わった人ですから今さら彼に気をつける必要はありませんが、そんな人があちこちの自治体にいないとは限りませんし、財政上立ち行かないからやめるとなったときにも、日本の宝ですから、将来のために標本はちゃんと保存していくことが必要なのではないかと思います。

中部大学のホームページを見せていただいていたいいなと思ったのですが、私たちもよくわかってきたのは、幼児・児童・親子、高校生、大学生、一般成人で内容を違えたほうがいいのかかなりあるということです。話をするにしても、展示をするにしても、何をするにしても、誰に聞かせようとしているのか、誰に見せようとしているのか、相手をはっきりしておいたほうがいい。私は国立科学博物館でもそれを強く言っております。

それから、学校との連携が非常に重要ですので、博物館の効果的利用法について教員が学ぶ「教員のための博物館の日」というのを科博で始めました。これは今全国 70 カ所でどんどんやり始めています。もっともってもらいたい。先ほど日本は連携が弱いと申しましたが、確かにまだ弱いので、各種の博物館が学校と連携するというのをぜひやってもらいたいと思います。

中部大学もいろいろなアイデアをお持ちだと思います。自分の持っている一番いいところを生かし、大学の中で博物館がある役割をとっていただけるように、今ももうそういうことをやっていらっしやると思いますが、さらにそれを強化していただければと思います。どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

○司会(宗宮)

林先生、ありがとうございました。林先生のお話は、科学とは一体何かというような大変基本的なところから、科学がものすごく発達したとしても社会や人々の暮らしが幸せにならなかつたらそこに意味はあるのかというようなところまで、いつもちゃんと押さえてくださって、大変ありがたいと思っております。

ここで名古屋大学特任教授の足立先生からコメントを

いただきまして、その後、会場からご質問を受けたいと思います。よろしくお願いします。(拍手)

○足立

皆さん、こんにちは。林先生のお話を聞かせていただいて、今日はすごく勉強になりました。ありがとうございます。

林先生は、東大の博物館長、科博の館長をされて、非常にアイデアマンであり、いい博物館をつくられています。これはどうしてかなと考えていましたら、まず名前がいいのですね。「林良博」、つまり「良い博物館」ということで、最初から運命づけられているかのような気がいたしました。

ちょうど林先生が東大で館長をしてみえた 1998 年、1999 年ごろには、今日ここにおみえの山下先生が名大の副学長で、名古屋大学にも大学博物館をつくらうということで、私は何回も文部省へ行ったりしておりました。2000 年にやっと実現したわけですが、そのときいろいろ考えたことの中には、今日の林先生のお話と大分かぶるところがありました。

まず、名古屋大学の博物館は、愛知県の博物館とも違うし、名古屋市の科学館とも違うし、東京大学の博物館とも違うし、科博とも違うということで、どういう特色を出そうかと考えました。その中の一つが、「自然から学ぶ (Learn from Nature)」というスタンスを大事にしようということでした。学生も外に連れていくし、親子も一緒に外に連れていって、自然の仕組みを教えようと考えました。

もう一つ、先生からも科博の剥製のお話が出ましたが、あれは本当にすばらしくて、癒しになるというのは、まさに僕もそのとおりだと思います。これを名大で考えますと、私、2002 年にオーストラリアのマッコーリー大学で開かれた国際的な UMAC (University Museums and Collections) の集まりで「ミュージセラピー (Musetherapy)」という話をしております。例えば中部大学が持ってみえる蝶の 20 万点のすばらしいコレクションもそうでしょうが、別に宝石でなくても、蝶でも、石ころでも、それがどんなものであれ、いい標本は必ず人の心を打つわけです。「これはいいな」というものがあります。そこから好奇心も出てくるし、また人によっては癒されも

します。博物館というのはそういう機能を持つべきである。いい標本や芸術作品、あるいは自然そのものも、全部人の心を癒すことができます。そういう効果があるということ。を、「museum」や「music」の語源である「muse」に「therapy」という言葉をつけてあらわしました。

私たちは、この「ミュージセラピー」と「自然から学ぶ」という二つを核にして、大学で博物館コンサートをずっと開いています。博物館コンサートをすると、固定客があって、普通では来ることのない 100 人ぐらいの人が必ず外から来ます。そして、ついでにいろいろなものを見ていってくれます。

もう一つ、博物館というのはどうしても箱物で、一つの建物ということになってしまうのですが、名古屋大学では、「キャンパスミュージアム」ということで、キャンパス全体を博物館にできないかと考えました。東山キャンパスはこことちょっと似ていて、山あり谷ありというか、ちょっとした坂があります。そういったところも利用しながら、例えば、ここへ行くと 2001 年の野依先生のノーベル賞のことがわかる、ここへ行くと小林・益川のノーベル賞のことがわかる、ここへ行くと昔粘土を使って陶器を焼いた跡がある、ここへ行くとコナラやアベマキといった植物があるというように、キャンパスの歴史も大学の特徴もわかるようなことを考えました。

今も細々と続いています。今日のお話を聞いていて、自然災害があつて津波でなくなってしまったところへ科博から出前で標本を持っていかれたという、あれはすばらしいことだと思いますので、名大でもこれからできないかなと思っております。それから、最後のスライドに出てきた教員を再教育するためのコラボレーションも何かできないか。科博、中部大学、名古屋大学、科学館等々、いろいろなところで今以上にもっとネットワークをつくり、なかなか貸してもらえないものを借りるとか、姉妹校提携を生かして海外の大学から何か持ってくるとか、そういったことも一つできるのかなと思いました。

林先生の「良博」というお名前のごとく、ぜひこの中部大学でもよい博物館にしていっていただけたらと思っております。

○司会(宗宮)

足立先生、ありがとうございます。

では、まずは山下先生からご質問をいただきましょう。

○フロア1(山下興亜学長)

林先生、どうもありがとうございました。林先生と私は20年ぐらい前からの知り合いで、「なるほど、林節が出たな」と思いながら聞かせていただきました。

足立先生とも、博物館をつくるときに400万点の標本をどうするかということで悩んだものですが、僕が博物館をつくりたかった理由の一つは、博物館ならば、言葉などの媒体を使わずに、解釈の仕方とか余分なことはあまり言わずに、すべての人が実体験でもって私たちが生きてきた実物にそのまま入れると思ったからです。その人自身の生きたそのまが人類の歴史でありますので、とにかく実物が正しくあるということが一番重要なのではないかと思います。中部大学の場合はまだまだそこまでいいいっていませんが、とにかく今は媒体があまりにも多過ぎるでしょう。言葉だとか、絵だとか、いろいろなものを使います。でも、そういうことではなくて、実物を見ることが、自然からわれわれは何を学ぶのかというときの非常に重要な方法の一つなのではないかと思うのです。私はそう思っておりますが、いかがですか。

○林

100%おっしゃるとおりです。国立科学博物館は「教育博物館」から始まっていますが、やはり「教育」は教える側の論理でいくわけです。「学ぶ」というのは、本当に学ぶ側の立場からいけます。

今、東京駅の目の前にあります東京中央郵便局が大幅に改修され、後ろに巨大な百何mの建物が建ちました。地方の山の中の郵便局などはなかなか経費が出ないので、東京でもうけて地方を維持するという目的で全面改修したのです。ただ、前の古い東京中央郵便局は昭和4年起工のすばらしい建物なので、ぜひ残さなければいけません。そこで、私が前におりました東大の総合研究博物館でその2階と3階の部分を博物館にして、現在無料で見ていただいています。東大としては絶対に入館料を取らないということで、文部科学省と徹底的に交戦しました。

国立科学博物館では入館料を取っていますが、高校生までは無料です。あの付近で高校生まで無料の施設はほかにありません。65歳以上はもちろん無料です。大

学生はどうしているかというと、今は63校の大学と契約し、東京都内のほとんどの大学が含まれているのですが、大学がお金を払ってくださったら無料です。大学院生も無料ですから、大体30歳ぐらいまでは無料で入れるのです。要するに、学ぼうとする人たちに対しては無料であるべきという博物館の基本的理念をもとに、そうしているわけです。

話を戻しますと、あの東京駅のKITTE(キッテ:日本郵便が展開する商業施設)という建物だけで年間2,300万人の人が入っているのですね。博物館にはそんなに入ってくれていませんが、それでも相当入ってくださっています。たまたま来る人もおられますし、最初から目的を持って来る人もおられます。そこは癒しの空間です。全部本物を置いてあります。クジラの骨から、いろいろな種類のものがあるわけです。一見何の脈絡もなく置いてあるのですが、その置かれ方に実は一つの考え方があります。これらの本物からどういう息吹を感じるか、どうぞ自分で考えてくださいということです。要するに、説明しないのです。

これにより私の後の館長の西野が今本当に苦勞しているのですが、郵便局の偉い様はなかなかそういうことが理解できないのですね。それで、一切説明しないと大混乱を起こすので、どこかに小さくちらっと書いてあります。探さないとわかりません。あなたはここから何を感じますかということですから、博物館なのですけれども、ある意味では美術館に近いのかもしれません。

○フロア1(山下)

美術館は人工物ですが、博物館は自然物ですから、そこは全然違うと思います。

○林

確かにそのとおりです。私たちが扱っているのは基本的に自然物です。ただ、人工物からも、おのおの方たちがどう感じるかということはあるので。

○司会(宗宮)

ありがとうございました。ここで会場からいかがですか。どなたでも結構です。

では、誰もいないようですので、太田先生、お願いします。

○フロア2(太田明德副学長)

大変ありがとうございました。すごくおもしろかったですし、いろいろなことを考えさせられました。

一つ考えていたのは、いろいろな大学が科学技術遺産のようなものをたくさん抱え込んでいると思うのですが、ああいったものは非常に分散していて、一ところに集まっていません。学会が指定している科学技術遺産もいろいろあると思います。そういったものは、どこかでちゃんと保存しないと、いずれ散逸してしまうのではないかと非常に粗末に扱われていたり、ほとんど壊れているようなものも結構あると思うのですが、それを何とかできないものかと今何となく思っております。

○林

それについては科博で手を打っております。「未来技術遺産」という名前で登録証を発行しているのです。そうでもしないと、大体いいものは企業の中に置かれていることが多いのですが、新しい社長が来て、「こんなもの、場所をとっているだけだから捨ててしまえ」というようなことになってしまったりするのです。そういうときに、「いえ、これは未来技術遺産という名前で登録されているものですから」と言って防ぐわけですね。大きなものでは、10トンもあるような昔の発電装置であったり、小さなものでは、ついこの間、一番最初にできたセメダインを登録しました。金鳥の蚊取り線香も登録しています。

○フロア1(山下)

それは集めているのですか。

○林

うちが登録証を出して、その登録証でもって無理解な経営者やトップに価値を示せるということです。つまり印籠みたいなもので、印籠を発行しています。今はそれ以外の方法がなかなかないのですが、本当はどこかにきちんと置かなければいけないのだろうとは思っています。

○足立

名古屋大学にも2点か3点ありますよ。例えば、日本の電子顕微鏡のルーツである日立の国産第一号機のところには、「これが目に入らぬか」と、科博の印籠がちゃんと置いてあります。置いてあると、やはり来た人はそれを見て、「あつ、これは」というふうに意識がちょっと変わるようですから、非常にいい試みだと思います。

○司会(宗宮)

ありがとうございました。ほかにございませんでしょうか。

では、福井先生。

○フロア3(福井弘道中部高等学術研究所所長)

今日はどうもありがとうございました。

実物を見たりフィールドワークをしたりすることはとても重要だと思いますが、一方で、現在ITなどを使ったバーチャルなミュージアムやデジタルな標本といったものもあるかと思います。肉眼では見えないものが見えるようなことと実際の博物館とはどう連携していけるのか、そのあたりについてお聞かせいただければと思います。

○林

今日は博物館の欠点を言いませんでしたが、見えるものでないと思えないということが一つあります。

私が今どうやって博物館で見せることができるだろうと思っているものが二つあるのですが、それがまさにミクロの世界と宇宙です。ミクロの世界は顕微鏡などの特別な装置を使わないと直接見えませんし、宇宙は大き過ぎるのです。この二つのうち、まず今年はミクロの世界ということで、私が監修して世界文化社から『不思議で美しいミクロの世界』という本を出しました。翻訳なのですが、欧米にはすごいジャーナリストがいて、ミクロの世界とはこんなに美しいのかと思うような写真集を出していたわけです。それで、新宿のルミネが若い女性向けにつくった美術館的なところで、まず写真展を始めました。写真だけでは物足りないので、そのもとになっている物を科博から若干出展しています。年末年始に新宿のルミネゼロでやっておりますので、皆さん、ぜひどうぞ。

博物館ではミクロの世界と宇宙はなかなか相手にできないのですが、これを試みのスタートにさせようと思っております。できないものに挑戦することほどおもしろいものはありませんから、積極的にやっていきたいと思えます。

○フロア2(太田)

ミクロというお話ですが、福井先生のご協力を得て、実はうちの蝶類研究資料館でも非常に高精細な蝶の表と裏の写真を撮っております。小さいものはピントがずれてしまうのですが、深度合成をして重ね合わせると立体

的なすばらしい写真ができるわけです。

○林

そういう意味で、本物でなければいけないというのも、あまりそればかりにこだわると原理主義になるのではな
いかと僕は思っています。今やっておりますラスコー展
でも、あの洞窟の壁画はレプリカですが、本物とほぼそ
っくりです。太田先生が今おっしゃったような技術の進歩
があるからこそ、本物でないものも本物の世界に近づけ
ると思うべきなのかもしれません。あまり原理主義的にな
らずに、今あるテクノロジーですばらしいものは大いに
使っていくべきではないかと思います。いいお話をあり
がとうございました。ぜひ一度見せてもらいたいもので
す。

○フロア4

私は本校で昔教えていたことがある者です。

かなり前、学生を引率してアメリカへ語学研修に行っ
たとき、日曜日に学生を校外学習へ連れていくことにな
りました。「どこに行くんですか」と聞くので、「博物館」と
答えたら、「ええ一つ」と言われました。過去の負のイメ
ージを打破するために博物館の活動を変革するというお話
がありましたけれども、まさに先生がおっしゃったように、
学生たちは子供のときから博物館に対してすごくネガテ
ィブなイメージを持っているわけですね。

一方で、たまたま行った博物館でお父さんと子供が一
緒になって本当に楽しそうに展示物を見ている印象的な
場面を見たことがあります。そういう子供は、お父さん
やお母さんと博物館に行き、こんなに楽しいところなの
だという経験をしているので、ちっともネガティブなイメ
ージを持たないのだらうと思います。子供が行きたい博物
館を目指すというお話もありましたけれども、では、それ
をどういう具合にしてやっていけばいいのか。ネガティブ
なイメージでなく、博物館は楽しいところだという意識を
子供のころ身につけさせるにはどうしたらいいのか。

例えば、一昨年たまたまオレゴン州のポートランドの
科学博物館へ行く機会があったのですが、恐竜が動い
たり音を出したりしておりまして、そういうものを見て子供
たちが騒いでおりました。いろいろなものがあつたので
すが、まさに遊園地みたいな感覚で、子供たちが本当に
喜んで見ておりました。そういうことを子供のころに経験

したら、僕が引率して連れていった学生のような育ち方
はしないのかなと、先生の話聞いて、そのようなことを
思い出しておりました。

○林

ありがとうございます。その点は国立科学博物館でも
ものすごく悩んでいるところです。

例えば、僕らも2年半に一度は絶対に恐竜展をやろう
と考えております。それを保証するだけの科学的進歩が
ありますから、実際にできるわけです。それで、ついこの
間の恐竜展では、今わかっている範囲の中で恐竜の親
の鳴き声と子供の鳴き声を復元しました。恐竜は角みた
いなものを持てていて、そこが共鳴装置になっている
のです。これは科学的にほぼ言えるだろうということだ
した。中には恐竜とゴジラを混同している人もいます
が、簡単に「ガオー」と鳴かせるようなことはしません。
動かすことも、福井のほうではしておりますが、うちはし
ておりません。

恐竜展を見て出てくる子供は、男の子でも女の子でも、
10人に1人ぐらい、がに股で歩いて出てきます。よほど
感動しているのですね。でなければ、出てくるときにが
に股になるはずがありません。ところが、それは間違い
ですから、本当は間違いだと教えなければいけないの
ですね。ワニはがに股ですが、恐竜はがに股ではありません。
うちはなるべく科学的でありたいというところにこだ
わっておりますし、そこが恐竜の最大の特徴なので、本
当はそういう歩き方をしてもらいたくないのですが、本当
に喜んで興奮している子供にとっては大きなお世話で
すから、言わないようにしているわけです。ただ、今おっ
しゃっていただいたように、子供が感激すると、すごく深
いところに残るのだらうとは思っています。

○司会(宗宮)

ありがとうございました。

僕は動物学をやっておりますが、今はどこへ行っても
遺伝子ばかりで、ものすごく学問が細かくなっています。
ただ、それが終わったときにはもう一遍、博物学というか、
現物というか、そういうところへ戻ってこざるを得ないと思
うのですが、その辺についてはどうでしょうか。

○林

おっしゃるとおりですね。要するに、博物館の役割を

果たすには、別に博物館という館がなくてもいいわけです。

例えば、自動車は何十万点、飛行機は百万点を超す部品を持っていますが、それを一つ一つきっちりつくってもらわないと、自動車も飛行機もばらばらになってしまうかもしれません。そのそれぞれをしっかりとつくるというのが、昨今どんどん分科しているミクロ科学の役割なのだと思います。どんどん精密になって、先端化して、それだけのきちんとしたものがつくれるようになるのです。しかし、それを最後に統合して初めて車になり、飛行機になるわけですね。それこそが大学の中に博物館があることの意味だと思います。そして、博物館という装置は、たとえ建物がなかったとしても、学問の統合化にかなり大きな役割を成すのではないかと思っております。

○司会(宗宮)

ありがとうございます。このほど中部大学は、名古屋キャンパスに太田先生を館長とする蝶類研究資料館をつくりました。それを機会に博物館ということをもう少し考えようという機運が出てきましたので、今回、林先生にお越しいただき、講義をしていただきました。足立先生もありがとうございます。

あっという間に時間がたってしましまして、4 時をちょっと過ぎましたので、もう一度拍手をして終わりたいと思います。ありがとうございます。(拍手)

では、これで終わります。ご参加の皆さん、ありがとうございました。(了)

(本講演記録は、録音原稿を宗宮が編集したものです。スライド等は省略しました。)